

写真で見る此花区と「伝法」

11月23日、大阪市立中央図書館の帰りに阪神電車で伝法駅まで乗り、冷たい風のもとで、淀川沿いを街歩きした。写真は大阪市漁業協同組合の手前にある淀川の水門である。高潮対策として1964年に完成したという。

『写真で見る此花区』1990年を見ていると、「昭和初期の伝法閘門」中堂茂画が掲載されていた。伝法港から閘門を利用して淀川に向かう様子がわかる。なんだか風情を感じさせる。その右の写真は沈み行く伝法閘門として、次のような説明がある。「伝法閘門は淀川改良工事で、明治6年11月竣工した。昭和に入り地盤沈下のため全くその機能を失い、閘門に代わって、昭和39年伝法水門が竣工した」

戦前の大阪は日本経済を牽引する工業都市であった。なかでも此花区は「西六社」（住友金属・住友化学・住友電工・日立造船・大阪ガス・汽車製造）などの大きな工場が立地していた。重化学工業化により、地下水のくみ上げで地盤沈下がすすんだ。淀川に向かう閘門が沈んで行く写真は、戦前「大大阪」の時代から、戦後大阪の歴史を物語るものといえる。

伝法を街歩きして感じたのは、レトロで落ち着いた昭和の風景だ。「昭和4年当時の尼崎街道（現伝法4丁目）」中堂茂画から、昭和初期の伝法の様子が伝わってくる。阪神電車が走り、商店街に多くの懐かしい店が並ぶ。天秤棒をかついで商売する人、子どもたちの姿も見える。

『写真で見る此花区』冒頭、京都大学名誉教授で建築家の西山卯三先生「発刊によせて」が掲載されている。先生が画かれた昭和5年(1930年)ごろの西九条の家並みには、家の洋館2階の窓から、長屋のならんでいる裏側と、東北の方を見渡した眺めと書かれている。先生の家は、西山鉄工所を経営されていた。「発刊によせて」から、当時の安治川周辺を紹介したい。工場裏の田んぼには雨が降るとスッポンが首を出し、安治川はきれいで春になるとシラスが群れをつくって上って来た。工場で焚いた石炭殻で田んぼを埋め立てていったが、土地は大地主・松井家の借地だった。家の向かいも裏も鉄工所が並び、その間に長屋が建てられた。工場からの煙で空はくもり、新建ちの家もススですぐよごれてきたなくなり、西九条は緑のない工場街になっていった。



(2021年12月10日)